
特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所

ニューズレター

Institute for Global and Cosmic Peace IGCP Newsletter



第 14 号

2008 年 3 月 21 日

もくじ

巻頭言

- ・宇宙平和の構築のために 汪 鴻祥 2

特集所報第二号発刊記念

- ・「冷戦」について 渡辺 宏 3
- ・国際関係論・国際社会論から宇宙地球史・地球社会論・地球宇宙平和学へ
20 世紀の学問から 21 世紀の学問へ 中西 治 4
- ・私の夢 岩木 秀樹 5
- ・地球と宇宙の平和、それって、誇大妄想？ 吉野 良子 6

- ・理事会報告 8
- ・地球宇宙平和研究所所報について 13
- ・事務局からのお知らせ 14

巻頭言

宇宙平和の構築のために

汪 鴻祥（地球宇宙平和研究所理事）

私たちの研究所の定款には「地球と宇宙の平和のために貢献することを目的とする」とある。無限大の宇宙空間は人類にとって、神秘的な世界であり、神聖な世界でもある。この宇宙空間の平和を構築することは人類の強い信念である。

しかし、しばらく前に宇宙平和を心配せざるを得ない事態が起きた。日本時間の 2 月 21 日 12 時 26 分、太平洋北部の海域にある米軍巡洋艦から発射されたミサイルが、地上 200 キロ余り離れている「アメリカ 193」号の偵察衛星を撃破したことである。アメリカ政府は制御できなくなった衛星の有毒燃料が人類に健康被害を及ぼす恐れがあるために撃破したと弁解した。

国際社会はこれに対して強い懸念を示した。ロシアはアメリカの本当の目的は新型宇宙兵器の試験にあると非難し、中国はアメリカのこの行動が宇宙空間や他国の安全に損害をもたらす恐れがあると指摘した。

アメリカの有識者もこの行動の意図がアメリカのミサイル防衛システムを試験するためであるという見解を示している。

ミサイルによる衛星撃破前の 2 月 12 日、中国とロシア両国は宇宙空間での兵器使用禁止条約を締結する共同提案を国連軍縮会議に提出した。しかし、宇宙空間の軍事競争を防止し、宇宙空間の平和と安全を維持するこの提案はアメリカに拒否された。

アメリカの一連の行動からはその戦略意図を見抜くことができる。つまり、アメリカはその先端的宇宙空間技術を利用し、宇宙空間における軍事優勢を追求し、拡大していくことを図っているのである。

宇宙空間の平和はどうなるのか、これは杞憂ではなく、国際社会の厳しい現実の問題となっている。

宇宙空間は超大国の独占空間ではなく、地球の住民、宇宙の住民の共同空間である。宇宙平和の構築は、われわれ地球の住民、宇宙の住民の重大な責務であり、崇高な使命である。

宇宙平和の実現のためには平和の手段を使用しなければならない。平和の手段として、平和の対話、平和の交流、平和の協力を行うことが必要である。民衆の宇宙平和意識の向上、国連など国際機構の宇宙平和における役割の強化、また、関連大国の宇宙平和における協力の推進などが重要な課題である。

宇宙平和のために、私たちの研究所が果たすべき役割は大きい。宇宙的視点から平和問題を論じ、21 世紀の新しい宇宙平和学を創り出していきたい。

特集 所報第二号発刊記念

特集 所報第二号発刊

「冷戦」について

渡辺 宏（地球宇宙平和研究所副理事長）

国際政治学者のハンス・モーゲンソー（1904年～80年）は、冷戦初期の米ソ関係を次のように描いている。

「二人の巨人が用心深く、疑心暗鬼で互いの目をじっと見合っている荒々しい光景である。……両者は、もし自分がやらないと相手にやられるだろうという理由で、相手に対して決定的攻撃に出る準備をしている」

パワーポリティックスを重視するモーゲンソーは、お互いの恐怖を背景とした、二大国間の敵対関係として米ソ関係＝「冷戦」を捉えていた。

第二次大戦後の国際関係を規定していた軸のひとつは、間違いなく米ソ関係であり、これをどのような「関係」として捉えるかということは、それはそのまま戦後の国際関係全体をどのようなものとして把握するのかということにつながっていた。そして「ポスト冷戦」という言葉が端的に示しているように、戦後の米ソ関係というものを、「冷戦」としてトータルに把握することが、現在ではほぼ一般的になったようである。

しかも近年は、特にアジアにおける戦後の国際関係を考える場合、「冷戦」というものが米ソ二国間の「関係」を表すものとしてではなく、一方的な米国の国際的な支配のための「体制」として捉えられるようになってきているように感じる。そこでは、もはやソ連は二次的な存在に過ぎず、米国の意志こそ「冷戦」の性格を決定する大きな要因とみなされる。「関係」を表すものから、「体制」を表すものへと、「冷戦」の意味合いも変わってきている。

当研究所の所報第2号に掲載されている中西治さんの論文を読んで、最も印象に残ったのは、その米ソ関係観であった。それはモーゲンソーの敵対関係とも、米国の支配体制とも異なった認識である。

中西さんは、戦後の国際関係を米ソ両国の協調・協力を前提としたヤルタ・ポツダム体制として捉えており、「冷戦」はその一形態ぐらいに考えている。つまり戦後の米ソ関係とは、決して片方の国が相手を無き者にしようとするといった一方的なものであったのではなく、あくまでもお互いが相手に対して常に影響を与えあってきた、相互による「関係」であったということである。そしてこのことを前提とした上で、米ソ両国の建国以来の歴史的経緯、為政者の能力とパーソナリティ、為政者同士の関係や相性、米ソ以外の第三国との関係、民衆の動向といったものが複雑に関連しあってきたものが、戦後における米ソ関係の実態であったとしてい

る。

中西さんが描くスターリンやルーズベルトや毛沢東等を見ていると、彼等は共に巨大な「なにものか」と必死になって闘っていたような気にさせられる。彼等が用心深く目を凝らしてじっと見つめていたものは、お互い同士なのではなく、その「なにものか」に対してであったなどと言ったら、歴史に無知な者の妄言となってしまうのであろうか。

特集 所報第二号発刊

国際関係論・国際社会論から宇宙地球史・地球社会論・地球宇宙平和学へ 20世紀の学問から21世紀の学問へ

中西 治（地球宇宙平和研究所理事長）

私は幼いころから大きなこと、新しいもの、未来を考えることが大好きであった。第二次大戦中の小学校（当時は国民学校と称したが）のときに新聞や世界の歴史についての書、偉人の伝記などを拾い読みした。戦後の高等学校時代に戦争反対と平和の思想として、また、人類の未来を考える思想としてコンミュン主義に関心を持った。大学ではロシア語を学び、ソヴェト社会主義共和国同盟の経済・政治・外交を研究した。大学院では当時流行りだした国際関係論（International Relations）を専攻し、ソヴェトとアメリカ合衆国の関係を専門とした。

通信社・放送局で国際関係の報道に従事した後、大学で政治学、国際政治史、国際関係論などを講じるようになり、大学院で国際社会論の研究指導を担当するようになった。国際関係論も国際社会論も、それまでの大学や大学院のカリキュラムにはない新しい学問であった。この学問の確立に取り組み、到達したのが宇宙地球的観点から地球の人間と社会を見、平和を考えることである。宇宙地球史、地球社会論、地球宇宙平和学がこの学問の枠組みである。

1492年のコロンブスのアメリカ大陸到達後、地球は本格的に一つになり始めた。1648年のウェストファリア会議により近代国家を基礎とするヨーロッパの「近代国際政治体系」が出現した。ヨーロッパの国々はたがいに競い合いながら、アメリカ、アジア、アフリカの諸地域を植民地または半植民地にし、ヨーロッパに従属させた。1776年のアメリカ独立革命はこの従属を断ち切る闘いの烽火であった。

「ヨーロッパは一つ」「アジアは一つ」「アフリカは一つ」「アメリカは一つ」などの思想と運動はヨーロッパの強国を中心とする体制に対する挑戦であった。それは19世紀から20世紀にかけての考えであり、20世紀後半にヨーロッパ連合やその他の諸地域連合の形で実現しつつある。現実には地球上に線を引く国家や地域にもとづく考えを越えている。ヨーロッパ連合ではトルコの加盟が論議されているし、東南アジア諸国連合（ASEAN）友好協力条約にはアジア・オセアニアの国々だけではなく、ロシアやフランスなども加わっている。

「地球は一つであり、多様である」「人々は自立と自治を求め、地球的規模のつながりを望

んでいる」これが 21 世紀の思想と運動の基礎にある。私たちの研究所は新しい時代にふさわしい新しい学問を創り出し、広めることを目的としている。『地球宇宙平和研究所所報』創刊号と第二号はそれが現実に始まったことを示している。

特集 所報第二号発刊

私の夢

岩木 秀樹（地球宇宙平和研究所事務局長）

所報第 2 号の編集後記にも書きましたが、業績を内外に知らせる所報のような研究論文集の発行が一つの夢でした。皆さんの努力のおかげで第 2 号まで出すことができ、年刊誌として少しずつ軌道に乗ってきたと思います。

事務局を担当しているので、平和への貢献や会員への満足を高めること、財政基盤の拡充などの課題を考えることが多いのが現実です。このような課題や問題を考えると時にマイナス思考になり暗い気分になる時もありますが、その一方で夢を想像すると楽しくなります。

所報発行の他にも研究所に関して個人的な夢があります。特に情報提供活動に限って言えば、地球宇宙平和学叢書とブックレットの発行がそれです。叢書は書店に並ぶような形態をとり、私たちの平和学とはどのようなものかを世に問いたいと思います。編著や単著などを年に一回程度発刊したいです。ブックレットはすでに発行されているように、気楽に楽しく読めるものを中心にして、比較的薄くて読みやすいものがいいでしょう。

所報、叢書、ブックレットを、内容もさることながら、きちんと定期的に 10 年ほど発行すれば研究所の認知度と貢献度はかなり高くなることは間違いないでしょう。

このような 10 年後の研究所の姿を想像するとわくわくしてきます。また逆に現実の諸課題を考えると悩んだりもします。しかし夢と課題は全く別のものではないのかもしれませんが、夢と課題は表裏一体で、課題を克服することが夢をかなえる一歩にもなるのかもしれませんが、夢をかなえているうちに課題を乗り越えている可能性もあります。

これらのことは「禍福はあざなえる縄のごとし」や「人間万事塞翁が馬」とは少しずれているのかもしれませんが、苦しみのなかに楽しみや喜びがあることは事実でしょう。

個人的なことで恐縮ですが、子供により自分の時間が割かれいらしていた時に、中西理事長の「子育ての時期が人生の華」との言葉を聞きました。また事務局を担当して雑用に埋もれることがあります、何かを成し遂げたときの喜びはひとしおです。

確かカントが言っていますが、「目的と手段が一致していなくてはいけない、夢への一歩が目的でもある」との言葉を少しだけ納得できるようになりました。今後も皆さんの知恵を借りて、少しずつ夢に向かい、一步一步も目的としていきたいと考えています。

地球と宇宙の平和、それって、誇大妄想？

吉野 良子（創価大学奨励研究員）

地球宇宙平和研究所。何だか、怪しい団体のような名前である。地球と宇宙の平和を研究する？何だか大それた名前である。第一印象として、多くの人が研究所の名前に違和感を持つのではないだろうか。

地球、宇宙。いずれも私たちの日常生活からは、どうもピンとこない。遠く離れた世界のことのようにも思われる。では、こう言い換えてみると、どうだろう。地球温暖化、スペースシャトル。

2007年のノーベル平和賞は、ドキュメンタリー映画「不都合な真実」で主演したアル・ゴア前合衆国副大統領と、国連気候変動政府間パネル（IPCC）に贈られた。同賞が環境問題に贈られたのはこれが初めてだ。これは、環境問題がいかに人類全体として取組まねばならない地球規模での重要課題になっているかを示す出来事である。実際のところ、IPCC第4次報告（2007年）によれば、「北極圏の平均気温は、過去100年間で世界平均の上昇率のほとんど2倍の早さで上昇した」。NASAの観測によれば、2004年のわずか1年間で北極圏の永久流水（perennial ice）が73万平方キロ 全永久流水の14%に相当、トルコの面積とほぼ同じ！ も消失した。そしてこうした温暖化の原因は、90%以上の確からしさで、「人為起源の温室効果ガスの増加によってもたらされた」ものであることが明らかにされている。私たちの毎日の暮らしが地球環境に影響を与えているのだ。今や誰も、地球の未来、そして地球上の全生命に対して無責任ではいられない。

では、宇宙はどうだろう。先日亡くなったSF小説家A.C.クラークと、映画監督S.キューブリックによる「2001年宇宙の旅」が初めて上映されたのは、1968年4月6日だった。今からちょうど40年前である。そこで描かれた宇宙旅行や宇宙船での生活は、当時見る人に未来を想像させた。だが、それらは夢であった。しかし今日、宇宙旅行や宇宙滞在は現実である。つい先日3月11日にスペースシャトル「エンデバー」で宇宙へと飛び立った土井隆雄さんは、国際宇宙ステーション（International Space Station：ISS）に16日間滞在する。今年中には若田光一さんが日本人で初めて約3カ月のISS長期滞在を行なうことになっている。宇宙で人間が生活する時代はすでに始まっているのだ。宇宙旅行だって、夢じゃない。旅行会社JTBでは宇宙旅行が温泉旅行と一緒に販売されている。2005年から始まった同社の宇宙旅行事業は2007年には宇宙旅行保険も完備させ、月旅行、本格宇宙旅行（軌道飛行、ISS滞在！）、宇宙体験旅行（弾道飛行）、無重力体験の5つの魅力的なプランで私たちの宇宙への夢心をくすぐっている。2008年現在の価格は順に、120億円、30億円、1224万円、44万円～。無重

力くらいなら手が届く、と思われる方もいるだろう。あるいは、私たち庶民には到底無理！と諦める人もいるかも知れない。されど嘆くなかれ。無料で宇宙旅行体験が味わえる方法もある。Google Earth だ。Google Earth の詳細な説明は割愛するが、インターネットさえつながっていれば、世界中どこからでも宇宙遊泳気分を楽しめる。こうした科学技術の進展の中、一昨日3月19日付けの『ネイチャー』誌上で興味深い事実が発表された。地球から63万光年離れた太陽系外の惑星の大気にメタンと水が含まれるとの発見だ。これは、地球以外にも生命が存在する可能性が高まったことを意味している。

こうした現実を前にした時、私たちの生きる「社会」の中に、地球と宇宙という空間が確実に組み込まれ始めていることに気づくだろう。政治や軍事の世界では、すでに1980年代から宇宙は戦略的に利用されている。レーガン大統領が1983年に提唱したスターウォーズ計画は有名だし、軍事衛星にいたっては1957年のスプートニク1号の打ち上げに始まる。地球はもとより宇宙をも視野に入れた社会科学分野における研究が求められるのだ。

しかし、これまで地球や宇宙を科学すると言った場合、「社会」は埒外にあり、地球や宇宙は人間社会の外部に設定されてきたように思われる。況や平和をや、といった状況であったろう。例えば、地球科学という学問分野では、マグマやマントル、プレートなど地球内部の変化や火山活動などの分析、気候変動やエルニーニョ現象など異常気象の原因解明が主題とされてきた。先のIPCCの研究も例外ではない。東京大学には地球惑星科学専攻があるが、そこでは物理学、量子力学、天文学、地球流体力学、地質学・鉱物学、地理学などが開講されている。他方、宇宙科学では、天文学や物理学、スペースシャトルや人工衛星について研究する航空宇宙工学などが主要分野とされてきた。先の土井さんたちも所属する宇宙航空研究開発機構（JAXA）の宇宙科学研究本部の主要研究部門は、科学衛星やロケット、大気球、宇宙理学、宇宙工学、宇宙環境利用科学である。

もとより、こうした既存研究の重要性はますます高まっている。それによって上述の環境問題の解決策が模索され、宇宙が私たちの生活の中で身近になったのだから。だが、だからこそ、今ほど地球と宇宙という2つの空間を私たちの「社会」の内部に包める必要がある時代もないだろう。そして、それが平和と密接に結びついた時代も他にない。この意味において、社会科学 歴史や政治、国際関係、経済そして文化を扱う学問 が地球と宇宙をその主題とすべき時がやってきている、と言って過言ではないのである。そう。私たちの研究所は、少なくともその名前と志に限っては、時代の最先端を行っている！このエッセイのタイトル「地球と宇宙の平和、それって、誇大妄想？」の答えは、No! である。

この度、中西理事長が中心となって「地球史研究」プロジェクトが開始される予定だ。今後は、環境問題やグローバル化、宇宙空間と人間社会、あるいは宇宙観の変遷、宇宙の存在が文明に与えた影響などについても更なる研究を進める必要があるだろう。こうした研究は一人の手には負えない。多くの人々の参加が求められる。自由な発想も重要となろう。研究者いかに関係なく、各人が自身の生活という観点から地球と宇宙について考えてみてはどうだろう。そうした思索の発表の場として、是非、所報を活用していただければ、編集に携わる者として嬉しく思う。

理事会報告

第4期理事会第2回会議

2007年7月8日(日)午後3時から5時まで、かながわ県民活動サポートセンター711号室で、理事9名(書面表決者含む)、監事1名が出席し、第4期理事会第2回会議が開催されました。まず、役員が委員会の担当につき、それぞれの事業に責任を持ち、企画・立案・執行をすることになりました。組織も多少手直しし、より現実に即したものにしました。担当については以下の通り(以下、全て敬称略)で、カッコ内は責任者です。

・事業財政委員会 (徳永 雅博)

・企画広報委員会 (竹田 邦彦)

企画部 (竹田 邦彦)

デジタル・ニュースレター部 (遠藤 美純)

広報宣伝部 (近藤 泉)

・学術委員会 (渡辺 宏)

研究教育部 (林 亮)

ブックレット・叢書部 (王 元)

所報部 (岩木 秀樹)

・交流委員会 (汪 鴻祥)

日本国内 (中西 治)

中国 (川崎 高志)

ロシア・朝鮮 (神保 泰興)

アメリカ (浪木 明)

その他のアジア (未定)

ヨーロッパ (未定)

中東・アフリカ (未定)

またニュースレターと所報編集の担当は以下の通りです。

・ニュースレター編集責任者 遠藤 美純

委員...近藤 泉、渡辺 直毅

- ・所報編集責任者 岩木 秀樹
委員...林 亮、渡辺 宏、王 元、吉野 良子

会員への情報提供について、紙ベースとともにホームページなどを利用して行い、経費節約、効率化、ホームページの充実による宣伝強化を目指すことになりました。

学术交流については、西安とラサの旅については今回は見送ることにして、朝鮮と中国東北の旅については今しばらく様子を見ることになりました。今後、2008年2月25日 3月6日にはキューバの旅、2008年2・3月頃にはピース・スタディ・ツアー・沖縄 戦跡と基地の旅 の計画を進めていきます。またキューバの旅の事前学習として、9月からスペイン語講座を開講していくことになりました。

教育事業について統一テーマを設けて、内外の著名な方を講師にお迎えし、講義または演習を2007年9月9日、23日、10月14日、28日、11月11日(全5回)に行うことになりました。近く会員の皆さんにお知らせする予定です。

所報第2号発行について統一テーマ(仮題)を「21世紀の平和学と東アジアの平和」とし、10月末日原稿締め切り、12月に発行する予定です。皆さんの原稿をお待ちいたします。

研究所の中・長期的展望について、事業財政委員会を中心に、まずは2年後、4年後を目標に、研究所のあり方、財政基盤の整備を論議していくことになりました。地域社会との協力の一環として、磯子区 NPO 連絡会に参加して、さらなる交流をすることになりました。

理事会の後、合同研究会が午後5時から8時まで711号室で、以下のような内容で開催されました。

- 中西治「朝鮮戦争と東アジアの平和 ヤルタ・ポツダム体制から21世紀地球体制へ」
- 木村英亮「キューバ革命の歴史と展開」
- 汪鴻祥「中国外交とアジア平和 1949年以來の中国のアジア外交を中心として」
- 玉井秀樹「平和構築支援:これまでの取り組みと現状」
- 岩木秀樹「最近の国際関係学の研究動向 宗教間対話の課題と近代西欧国際体系の限界」

ここには13名の方が参加され、様々な議論がなされて、充実した研究会となりました。報告者及び参加者の皆さんに感謝いたします。

第4期理事会第3回会議

2007年9月9日(日)午後4時から5時半まで、かながわ県民活動サポートセンター711号室で、理事11名(書面表決者含む)、監事1名が出席し、第4期理事会第3回会議が開催されました。まずキューバへの学术交流についての報告があり、今後の方針についての意見交換がなされました。

1. 準備は順調に進み、10月以降にキューバ大使を表敬訪問し、さらなる交流の充実を図り、またスペイン語講座も開催されることとなった。
2. キューバ大学や日本研究者との交流を恒常化させ、意義あるものにする
3. 交流の映像や音声を残し、記録に残すとともに今後のプロモーション活動に役立てることになった。
4. ピース・スタディ・ツアー“沖縄 戦跡と基地の旅”も、今後日程を調整しながら、3～4泊程度で研究会や沖縄の大学等とのシンポジウムも行い、充実したものにする

所報第2号は当初の予定通り、10月末〆切、12月発行を目指し、出来るだけ赤字を減らす努力をしながら発行することになりました。

新春講演会は2008年1月13日(日)午後5時半から、かながわ県民活動サポートセンター711号室で行われる予定ですが、会員の皆さんに講師の希望を募ることになりました。

「9条を広める会」については、今後とも会員の皆さんの意見を聞きながら、会員の活動として位置づけていくことになりました。

研究所の中長期的展望について、以下のような様々が意見があり、今後とも議論を継続することになりました。

1. 内容の割に集まる人が少ないので、他のNPOとの連携を深めながら、広報のやり方を工夫する必要がある。
2. 会員の皆さんに欲しい情報を提供する。
3. あらかじめ出席できる日程を事前に調整する。
4. 会員には聞くよりも主体的に話が出来る機会を作っていく。
5. 理事の自覚や各理事への役割分担を明確にする。
6. 今後学术交流についてはイニシャティブを持った人が責任を持って運営していく。
7. インターネットを使った教育活動を充実させていく。
8. 内外の機関や大学との交流・提携を充実させていく。
9. 専任の研究員をおくかどうか議論していく。

理事会の後、2007年度の教育活動の皮切りとして、午後6時から8時半まで同室でシンポジウム「現代における戦争と平和」が開催されました。報告者とテーマは以下の通りです。

植木竜司「ネパールにおける戦争と平和 マオイスト人民戦争と平和地帯宣言」

高橋勝幸「タイから見た平和と平和運動」

林亮「東アジア共同体の安全保障枠組みをめぐって グローバリゼーションの矛盾と戦争への道を回避するために」

木村英亮「ベトナム戦争の性格と意義について」

いずれの報告も刺激的で、現代の戦争と平和の問題を考える大きなきっかけとなるもので、時間を大幅に超えて論議が行われました。

報告を引き受けていただいた方、特に急遽お願いした植木さんと木村さんには感謝いたします。今後ともニュースレターや所報等で議論は続けていきたいと考えています。

第 4 期理事会第 4 回会議

2007 年 11 月 11 日（日）午後 5 時から 6 時半まで、かながわ県民センター 709 号室で、第 4 期理事会第 4 回会議が開催されました。出席理事は書面表決者を含めて 12 名で、オブザーバーは 2 名でした。

まず所報第 2 号発行について話し合わせ、継続性を重視することから、第 2 号の表紙は創刊号と同様なものにするようになりました。

新春講演会については、中西治理事長が講師となり、2008 年 1 月 13 日（日）午後 5 時から 6 時半まで、かながわ県民センター 711 号室で行うことになりました。またそれに先だって、午後 3 時から 4 時半まで 705 号室で理事会が、講演会のあと午後 7 時から 9 時まで新年宴会が開催されます。

2007 年度及び 2008 年度学术交流について、2008 年 2 月 25 日から 3 月 6 日までのキューバ訪問の準備が順調に進んでいることが報告されました。キューバ大使表敬訪問の後、日程・金額等が確定し次第、会員の皆様にお知らせいたします。また 2008 年 8 月から 9 月にかけて中国を、2009 年 2 月から 3 月にかけて沖縄を訪問する予定であり、それらの準備をすることになりました。

2008 年度事業計画について、以下のような様々の意見がでて、今後とも理事会等で検討することになりました。会員に会費に相応しい情報を提供すること。講師の派遣や海外からの人材受け入れ等の事業拡大をすること。合同研究会を増やし、相互の情報交換を増やすこと。土曜日の夜も有効活用すること。学术交流後にブックレット等による情報発信に力を入れることなどです。

認定 NPO 法人の資格取得に向けて、中西理事長を中心に 2008 年 3 月 31 日までに申請することになりました。

最後に 10 月 13 日に杉田劇場で行われた磯子区 NPO 連絡会設立記念イベントへの参加の報告が行われ、今後とも会員一人一人が各地の様々な NPO や団体と連携をはかっていくことになりました。

理事会終了後、午後 7 時から 9 時まで同室で、片山博文氏（桜美林大学准教授）による講義「グローバル・commons の構築をめざして」が行われました。ヒロシマの原爆映像なども紹介されながら、平和と地球環境の問題についての講義であり、新鮮かつ興味深いものとなり、質疑応答も 30 分ほどしました。

なお理事会に先立って、午後 1 時から 3 時まで青葉区区民活動支援センターでは、浪木明

氏によるスペイン語講座が行われ、午後4時から5時まではかながわ県民センターで所報編集委員会が開催されました。また講義終了後は和やかに懇親会も行われました。

第4期理事会第5回会議

2008年1月13日(日)午後3時から4時半まで、かながわ県民センター705号室で、第4期理事会第5回会議が開催されました。

出席理事は書面表決者を含めて11名で、オブザーバーは1名でした。

まず所報第2号発行について、印刷代は約38万円(全155ページ、表紙フルカラー印刷、600部発行)で抑えることができ、執筆者買い取りは現在までのところ約24万円で、諸費用も含めて現段階で約18万円の赤字となっていることが報告されました。今後、買い取りや販売等を通じて、すこしでも赤字を少なくする努力をすることになり、また次回の理事会で所報第2号の収支決算をすることになりました。

2007年度及び2008年度学術交流について、2008年2月25日から3月6日までのキューバ訪問の参加者は最終的に5名となり、2月10日(日)10時から横浜市青葉区区民活動支援センター会議室1で、結団式を開くことになりました。

2008年9月初旬に1週間程度で北京・中国東北を訪問することになり、それが確定し次第、朝鮮訪問を検討することになりました。また2009年2月下旬から3月初旬にかけて3泊程度で沖縄を訪問することも決まりました。

2008年度事業計画について、今後合同研究会を活発に行い、相互の知的コミュニケーション交流を活性化させることになり、研究会や学術交流をブックレットや叢書などの情報提供活動と連動させ、これらの成果を出版して広く世に問うことになりました。また地球宇宙平和学叢書を来年度、遅くとも再来年度には発刊することを目指し、具体的に検討することになりました。

理事会について、事前にメールで詳しい内容を知らせ、相互に検討した上で、濃密な議論をすることになり、今後理事会は3、4か月に1回程度開催することになりました。

理事会終了後、午後5時15分から7時まで711号室で、中西治氏(本研究所理事長)による新春講演会「地球社会の現状と私たちの研究所の課題」が行われました。そこでは、人類の誕生から説き起こし、近現代の地球の一体化や様々の革命、20世紀の地球秩序や現在の各地域の現状に触れ、最後に私たちの研究所の課題を展望されました。多くの非会員を含めて20名ほどが参加され、活発な質疑応答もされ、充実した時間となりました。

講演会終了後、新年宴会には10名以上の方が出席され、和やか、かつ活発に行われました。お忙しいところまた寒い中お越しいただいた方々に感謝いたします。

地球宇宙平和研究所所報について

所報第 3 号を下記の要領で発行いたしますので、多くの方の執筆をお待ちいたします。

- ・ 研究所報編集委員会を中心に編集発行を行う。
- ・ 会員及び編集委員会が認めた者が投稿できる。
- ・ 原稿は編集委員会において査読し、採用の可否及び修正を決定する。
- ・ 原稿の締切は 2008 年 10 月末日、発行は 12 月。
- ・ 原稿料は支払わない。
- ・ 定価は一冊 1,000 円、会員には一冊配布する。
- ・ 執筆者は 20 冊以上買い取る。買い取り料金は一冊 800 円。
- ・ 関連の研究所、大学、団体に送付する。その際紀要の交換もお願いする。

執筆要領細目

- ・ いかなる言語でも可、未発表でオリジナルなもの。ただし特殊言語の編集作業については執筆者本人に依頼する場合もある。
- ・ 枚数は 400 字詰め原稿用紙で注を含めて、論文は 50 枚、研究ノート・動向は 30 枚、書評及びエッセイは 10 枚とする。日本語以外の場合もほぼこれに換算する。
- ・ メール添付かフロッピーの郵送にて提出。手書き原稿は受け取らない。

書式

- ・ 横書き、横 38 字・縦 33 字、A4 サイズ。
- ・ タイトルおよび氏名には英語表記を付す。
- ・ 数字は半角・算用数字とする。章や節も同様のこと。
- ・ 「はじめに」や「おわりに」には章番号をふらない。
- ・ 注は算用数字で該当個所に 1、2 のように半角で句読点の後につけ、末尾に注をまとめ、通し番号をつける（可能な限り、ワード等の注機能を使用されたい）。
- ・ 注における引用文献の示し方は、以下の通り。

王元、汪鴻祥、川崎高志、林亮著『変貌する現代中国』白帝社、2004 年。

中西治「地球社会と地球史 ロシアでの地球学研究を中心として」『ソシオロジカ』第 30 巻第 1 号（通巻 50 号）創価大学社会学会、2005 年 12 月、17-19 ページ。

王他、前掲書、123 ページ。

中西、前掲論文、123 ページ。

同上、123 ページ。

Michael Cook, A Brief History of the Human Race, Granta Books: London, 2005, pp. 276-278; マイケル・クック著(千葉喜久枝訳)『世界文明一万年の歴史』柏書房、2005年、350-353 ページ。

『毎日新聞』2007年6月4日、朝刊。

Cook, op. cit., pp. 12-14.

Jan Aart Scholte, "The globalization of world politics," John Baylis and Steve Smith eds., The Globalization of World Politics: An introduction to international relations, Second Edition, Oxford University Press, 2001, p. 14.

Ibid., p. 23.

事務局からのお知らせ

今後の予定

合同研究会

日時: 4月20日(日) 18:00 - 20:00

場所: かながわ県民センター708号室

テーマ: 「中国及び東アジア」

総会記念講演会および総会

日時: 5月18日(日)

講演会 17:30 - 19:00 総会 19:00 - 19:45

場所: かながわ県民センター604号室

講師: 古田元夫(東京大学教授)

演題: 未定(東南アジア関連のもの)

所報論文発表研究会

日時: 2008年7月 時間未定(詳細は決り次第連絡します)

場所: 未定

新春講演会

日時: 2009 年 1 月 時間未定 (詳細は決り次第連絡します)

場所等: 未定

文化学術交流活動

中国訪問 2008 年 8 月下旬から 9 月上旬 1 週間程度 北京・中国東北

朝鮮訪問 2008 年 9 月前半 中国訪問とは別に行う

沖縄訪問 2009 年 2 月下旬から 3 月上旬

認定 NPO 法人申請完了

2008 年 3 月 5 日に所轄の横浜南税務署へ認定 NPO 法人の申請書を提出しました。今後、国税局職員による研究所事務所への査察があり、問題がなければ約 1 年後に承認される予定です。なお認定 NPO 法人となると、税の支援措置が受けられ、寄付をしていただいた方には、寄付金額 - 5,000 円が所得金額から控除されます。

地球宇宙平和研究所入会の案内

研究所の趣旨に賛同し、入会される方を広く募集いたしております。会員の方もご友人、ご家族等に紹介していただければ幸いです。入会希望の方は事務局まで連絡下さい。

- ・正会員 (総会での議決権あり) 入会金 5,000 円 年会費 5,000 円
- ・賛助会員 入会金 2,000 円 年会費 3,000 円

振り込み先

- ・銀行振り込み 三井住友銀行三鷹支店 (普) 1700950
名義人: 特定非営利活動法人地球宇宙平和研究所
- ・郵便振り込み 郵便振替口座番号 00120-7-16913
口座名称: 特定非営利活動法人地球宇宙平和研究所

事務局

事務局への連絡は以下へお願いします。

岩木秀樹 メール: hiiwaki@f4.dion.ne.jp

電話・ファックス: 0426-54-8505

住所: 193-0801 八王子市川口町 1607-1 サウスポート 203 号



特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所
ニュースレター 第14号

発行人 中西 治
発行所 特定非営利活動法人 地球宇宙平和研究所
〒235-0045
神奈川県横浜市磯子区洋光台 1-9-3
Web: <http://www.igcpeace.org/>
E-mail: info@igcpeace.org
発行日 2008年3月21日
編集人 遠藤 美純
頒 価 100円